

5章『悲しい真実』2

「バツカじゃないの？ ミロは3人目のあみたん娘なのよ。敵の黒蜜ちゃん側につくわけじゃないじゃん」。カノンが鼻で笑った。

「そうよ。これまでは苦戦してたけど、ミロが加わったことだし、アンタも撃破してやるんだから」。セシルも負けじと、黒蜜ちゃんに反論した。

「どうしよっかなあ」
しかし、ミロはこれ見よがしに迷う素振りを見せる。

「え？ 悩むトコ、そこ？」
「そうよ。否定100パーセントでしょ、普通」
カノンとセシルは、ミロの態度が信じられなかった。

あみたん娘

The NOVEL

酒井 直行



キャラクター原案 松原 秀典
イラスト 那智 泉 見

「だって私、別に戦うためにあみたん娘になったんじゃないし。青春時代の夢だったアイドルに魔法の力でならせてくれるって話に乗っただけ。それなのに、約束通り、アイドル

ルに変身させてくれたのはよかったけど、いきなり、『あみたん娘は、北陸の秩序を混乱させようとする悪者たちと戦わなきゃいけない』って、後出しジャンケンみたいに言われて、正直ムカついていたんだよね。それって詐欺商法ってヤツじゃん。契約するまでは都合のいいことしか言わなかったくせに、いざ契約した途端、細かい条件を突きつけて、余計なお金を請求したりする、内職商法みたいな？ クーリングオフしてもいいぐらいよ」
「内職商法？ クーリングオフ？」。カノンが首を傾げる。
「ミロの言ってることって、時々、イミフだね」。セシルもお手上げのジェスチャーでカノンと顔を見合わせた。

これが、それぞれ、11歳の小学生と33歳の主婦の世代間ギャップというモノなのか。全く会話が噛み合わない。
「ミロ。あみたん娘をやりたくないのなら、やめてもいいんだ。オレも、君が入ること自体、あまり賛成していなかったんだ」
阿弥貴が毅然とした態度でミロを睨みつけた。
「今更、それはないわね。それに阿弥貴よ。私は、カノンやセシルとは違って、弥勒菩薩だった時の意思をしっかりとこの胸の中に記憶しているのだ」
ミロが、阿弥貴の視線を真っ直ぐに受け止め、睨み返した。その眼差しは、これまで見せたことがないほど、真剣で透き通っていた。